

## 基本技術を徹底し、多収・高品質の大豆を目指しましょう！

- ◎近年、毎年のように異常気象が発生しています。収量・品質の安定化のためには、基本技術の徹底が今までに増して重要となってきています。
- ◎大豆の播種適期は5月下旬～6月上旬です。播種の遅れは生育量不足・収量低下につながります。適期内に播種作業が終わるように、計画的に準備を進めましょう。

### 1 排水対策は絶対必要！

大豆は湿害に弱く、特に出芽期の湿害は大幅な減収に直結します。排水対策を万全にすることにより、次のようなメリットがあり、多収につながります。

- 湿害を防止し、大豆の初期生育を助けます。
- 根粒菌の着生が促進され、活性も高まります。

#### (1) 排水対策

##### ①明渠の施工

トレンチャーやバックホーで、圃場額縁に深さ40cm程度の明渠を設置します。確実に排水するために、明渠は必ず排水口につなぎましょう。

播種以降も明渠が崩れたり、詰まっていないか随時点検し、必要に応じて補修しましょう。

##### ②補助暗渠の施工

排水不良圃場では、サブソイラや弾丸暗渠などの補助暗渠を施工し、排水性を高めます。補助暗渠は、本暗渠に接続することが肝心で、5～10mおきに施工します(図1)。

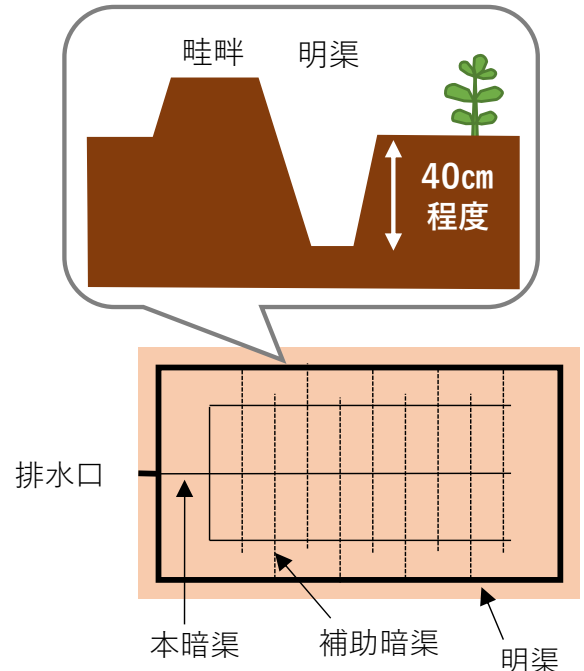


図1 明渠と補助暗渠の施工例

#### (2) 丁寧な耕うん・碎土を

碎土が不十分だと出芽揃いが悪くなり、除草剤の効果が低下します。また、ロータリー耕では、トラクターの速度が速いと耕起深が浅くなりやすいため、耕起作業はゆっくり丁寧にいきましょう。

播種時の圃場の碎土率(直径2cm以下の土塊%)は**7割以上**が目安です。圃場の排水対策を確実に実施して、乾いた土壌で丁寧な作業を行いましょう。

## 2 有機物施用と土壌 pH 矯正のセットで増収

### 大豆の連作が長くなるほど、地力窒素、土壌pHは低下します。

大豆が吸収する窒素は、そのほとんどが根粒と地力由来です（図2）。堆肥等の有機物や石灰資材の施用を継続し、地力向上と根粒菌の着生促進を図りましょう。

### (1) 土づくりと施肥

**安定多収のためには堆肥等の有機物を施用し、生育後半まで養分を供給することが重要となります。** 施用量の目安は、完熟堆肥で1～2 t/10 a、発酵鶏糞で100kg/10a程度です。

基肥窒素は、初期生育を確保するためのスターターとして重要です。必要以上の施用は逆に根粒菌の発生を阻害することもあるため、2～3 kg/10a（表1）を目安に施用しましょう。

大豆の生育量・収量確保には、地力の維持と根粒菌の着生が重要です。

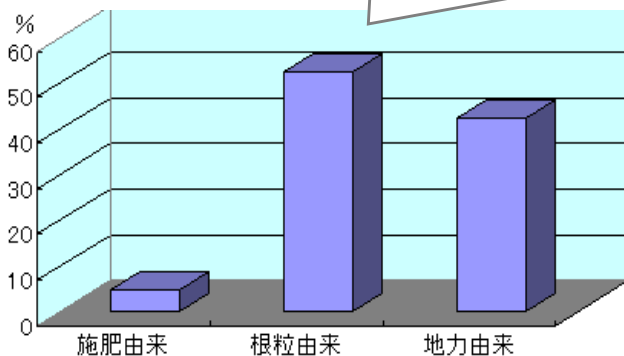


図2 大豆が吸収する窒素の内訳  
(山形農試 1980-1981)

表1 基肥施用量の目安 (kg/10 a)

窒素	リン酸	カリ
2～3	7～8	9～10

#### ▼基肥施用例

【大豆化成684】

→現物40kg/10a(窒素2.4kg/10a)

【高度化成 14 オール】

→現物20kg/10a(窒素2.8kg/10a)

【大豆専用一発S522】

→現物40kg/10a(窒素6.0kg/10a)

### (2) 石灰資材の施用で適正土壌 pH 6.0～6.5を確保！

**大豆が生育しやすく、根粒菌が働きやすい適正な土壌pHは6.0～6.5です**（写真1）。

炭カルで120kg/10a程度を目安にし、複数年に渡って継続的に石灰資材を施用することで、適正な土壌pHを確保しましょう。

表2 資材の種類と施用量の目安

資材名	炭カル	苦土石灰	粒状消石灰	ようりん
アルカリ分(%)	53	55	65	40～50
炭カル120kg相当の施用量	120	116	98	127～160



写真1 苦土石灰施用による土壌pH矯正と8/20頃の大豆生育  
※鶴岡市長沼実証圃の結果(R3)より。品種は「あやこがね」で、土壌pHは播種直前の値。

**農作業中の事故を防止しましょう！**

春季農作業事故防止運動実施中！ 4月1日～6月10日

ヘルメット・シートベルトを着用！